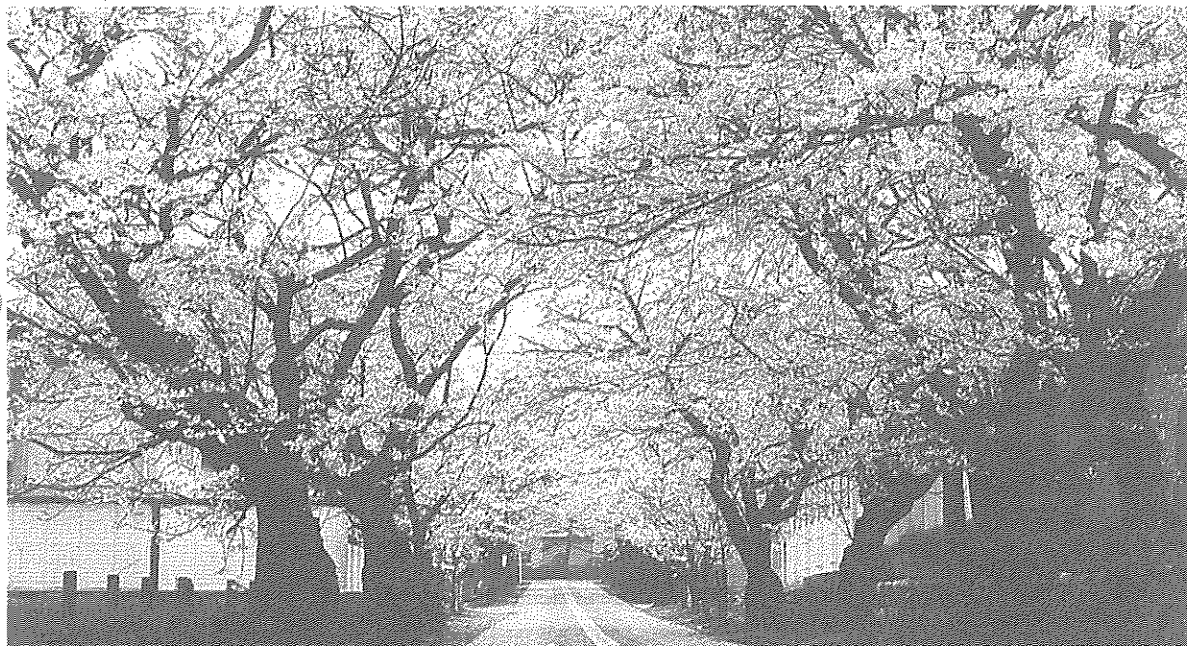


同窓会会報

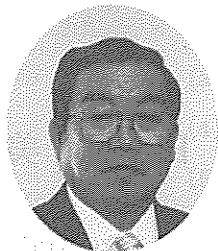
第53号

平成17年8月21日発行

富山県立上市高等学校同窓会



校舎前の桜並木



地域に根ざした上高を！

同窓会長 伊東尚志

同窓会員の皆様には、ますますご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

さて、いつの頃からか母校上市高校と地域・町民との繋がりが希薄になってきているのではないかという思いがいたします。

四十数年前、私が生徒として在学していた頃は、全校生徒の7、8割が上市町在住であったと記憶しています。今は、多くの生徒が上市駅を利用し、高校まで徒歩等で通学しているため、地域の人たちは、生徒を旅の人のように迎え、本校に対する関心もあまり高くないようです。

かつて、農業祭で旬の野菜、苗木等の即売や人気の野球試合には地域の人たちが大勢駆けつけ、応援に汗を流すなど生徒と地域の人たちとのふれあいの機会があったように思います。

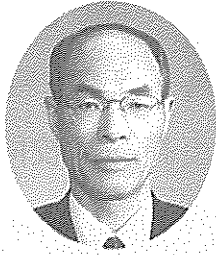
自然に恵まれた上市町は、天下無双の剱岳を有し、四

季折々の装いを借景としたイベントを、毎年開催しています。春の「つるぎ山菜まつり」、夏の「上市音頭町流し」、秋の「黒川フェスティバル」、冬の「剱岳雪のフェスティバル」など町の行事への生徒の参加が地域との交流拡大や信頼感の醸成に資するのではないかと夢見ている一人です。

生徒諸君には、「勤労・自治・向上」の建学の精神を引き継ぎ、世界に大きく羽ばたいてほしいと念ずる次第です。

今秋には、三年に一度の学園祭「上高ルネッサンス」の開催が予定されており、会員お誘いあわせの上、是非ご来校いただきますようお願いいたします。

暦の上では立秋が過ぎたとはいえ暑い日が続いており、会員の皆様のご健康・ご多幸を心からご祈念申し上げご挨拶いたします。



上市高校の更なる躍進を

校長 牧野 重雄

会員の皆様には、益々ご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。また、日ごろから本校の教育活動に深いご理解と多大なご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

本校は、平成9年4月、高校教育改革の推進役の使命を担い、総合学科単独高校として新しく生まれ変わりました。この総合学科教育の特色は、生徒自身の進路適性や学習のニーズに応じて、自ら科目選択を行い主体的な学習に取り組むことができることです。しかし、生徒の科目選択には、安易で怠惰な選択や一貫性のない科目のつまみ食いなどの課題がありました。

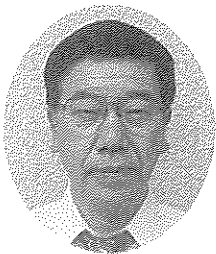
そこで、数年前から科目選択のガイダンスを充実させ、生徒一人ひとりに「自分は何のために、何に向かって、何を学ぶべきなのか」をきちんと考えさせる学習を実践してきました。

そして今年度、ついにコアカリキュラムの導入に踏み

切りました。生徒はそれぞれの進路により、一つの総合選択科目群を系統的に学習し、更に自由選択科目群から興味・関心のある科目を選択履修します。これによって、統一的でつながりのある勉強ができます。

私は、「生徒にとって高校生活の3年間は、ただ単に進学したい、就職したいというような目先の目標だけではなく、本当にやりがいのある職業を捜すための期間」であって欲しいと願っています。高校で学んだことは、原点にすぎません。時代の変化に合わせ、生涯を通じて学んでいかなければなりません。そういう意味からも、本校のキャッチフレーズは、「何を学ぶかを学ぶ学校」であると思っています。

終わりにになりましたが、会員の皆様の一層のご発展とご多幸を心からお祈り申し上げます。



日本語の乱れ

副校長 寺田 允美

上市高校生は元気な挨拶をし、この点は気持ちが良い。心がまっすぐ前に向いているのだろう。

しかし、本校生に限ったものではないが、広く若者全般に、次のような言葉が日常的によく使われる。「マジなの?」「めっちゃ嬉しい」「ビミョーにわからない」「私的には…」「チョー ムカツク」等の、断片的な若者言葉がそれだ。これは、若者の日本語の乱れであり、引いては国語力の低下である。そしてそれは、やがて国語力の崩壊につながるかもしれない。ただ、生徒自身、これらは同年代の仲間内同士でしか通じない言葉だと知っているらしく、先生など大人の前では使わない者もいて、これは救いであるが、気がつかない生徒もいる。

最近、「痴呆症」は差別的響きがあるからなのか、代わって「認知症」なる用語が使われている。これでは、本来の意味がわからなくなってしまう。

また、若者言葉に限らず、今の日本語全体のことであ

るが、カタカナ英語の増加による語彙の貧弱化も目につく。たとえば、昔なら「世話」「介護」「手入れ」「看病」「手当て」「心配り」等と繊細に使い分けて表現していた概念が、今ではすべて「ケア」一語で言い換えてしまっている。老人のケア、心のケア、お肌のケア、病人のケア等。(これらはどの意味だろうか。)要するに、困った状況に対して手を施すことは、何でも「ケア」で片づけてしまうのだ。アメリカ語への傾斜(さらに言えば狂騒)の中で、日本語の繊細な思考を放棄し、英語の論理に押し込めようとしている。

これら日本語の乱れは、すなわち日本語の構造的劣化につながる。これは何としても阻止したいし、私は、若者にも日本人の血が流れている限り、言語・文化的伝統は受け継がれていると信じ、彼らの<自然治癒力>を信じたいのである。